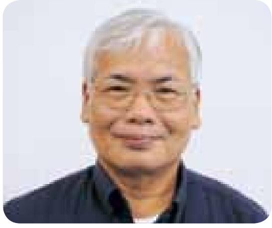
気分爽快

勇壮な3斤の手筒

三州幸田芦谷 煙火保存会



会長 本田和幸さん

東三河では盛んな手筒花火ですが、西三河で本格的な手筒花火は、数えるほどです。

現在会員数は、29人で8月のこうた夏まつりと、9月に芦谷区の彌栄神社例大祭での奉納花火「※半斤から3斤」の手筒花火を揚げています。

手筒に適した竹選び、伐り出し、渾身の力込め縄をきつく巻きつける。最後に竹の節を抜き、内部を磨きあげます。

いよいよ本番。

ロービで点火、暴発しないかと一瞬の緊張が走ります。筒を立てて火の粉を浴び、熱さに耐え、長くも短かくも感じられる奉揚時間。そして最後のハネの瞬間が最大の見せ場であり、醍醐味でもあります。観客の歓声で幕を閉じ、自らの火傷の跡は勲章でしかありません。

煙火保存会として、これからもみなさんに間近で見て、楽しんでいただくよう励んでまいります。

三州幸田芦谷煙火保存会は、昭和43年彌栄神社への奉納花火をきっかけに発足した「しょうぶ会」の思いを受け継ぐ団体で、神社奉納以外にこうた夏まつりにも参加活動しています。

※1斤は火薬800g

竹の伐り出し

筒の縄巻き

熱い絆で伝統受け継ぐ

会員アンケート集約から

保存会でのやりがい

地域の伝統を後世につなぐが7割を占め、達成感・世代間の交流など。

活動を通し感じること

違う年齢層の方々と会話でき勉強につながるが7割を占める。

楽しい事・つらい事

思いはそれぞれで、熱いが達成感があるが多く、暑い時期での竹採りや、花火を揚げるまでの筒作り・会場作りなどが挙げられる。

熱い絆の三州幸田芦谷煙火保存会の会員

住民の声を聞く パート19

熱いけど

女性会員の声

入会のきっかけは

生まれ育った場所では、手筒花火は身近なものであるものの男の人しかできない事と、うらやましく思っていたが、幸田町での手筒花火を知り毎年見に行くうちに、会員の方から女性も入会できると聞き入会し、早10年。

苦楽の面や励みは

話す機会も増え、いろいろな職種の人達と一緒にする作業は楽しい。

期待することは

女性会員が増えること。祭りで獅子舞もチャラボコ太鼓もなくなってしまった今、手筒花火はずっと残して欲しい。

新入会員にインタビュー

入会のきっかけは

2年前越してきた時の秋まつりを見て。(49歳)

15年前隣接する区に越してきた時、是非やりたいと思いたち5年前から申入れ入会に。(48歳)

厄年の時の夏まつりで経験が忘れられず入会を申入れ。新旧交代時期に入会できた。(42歳)

苦楽の面や励みは

花火を揚げるまでの準備や揚げる心得など講習で教わるが、揚げている時は熱いが終わった時の爽快感はいいようがない。

体験して分かること。

会員としての思いは

伝統を受け継ぎ、後輩に引き継いでいきたい。

筒内の節取り・磨き

完成した手筒

1斤の奉納花火

子どもたちの手持(ても)花火

奉納花火を一層盛り上げる子どもの手持花火には、お父さん、お母さん、ご家族の方の熱いまなざしに見守られ、子どもたちの勇壮な姿を記録に残そうと正面でカメラを構える。

子どもたちも晴れの舞台で、火を恐れることなく背筋を伸ばし胸を張って花火を揚げる姿に、観客から大きな拍手が送られていた。

アンケート 会員10人から

議会だより読んでいますか

読む…………2人
時々読む………8人

どんな内容に興味がありますか

町の変化・取巻く環境・子育てなど身近な内容。

読む広報誌とするには

議会での議論が生活にどう関わるかを、住民視点でストーリー性をもって楽しく読めるものに。

6年生の御神前奉納花火

議会に望むこと

将来にわたって持続していくに取り組むべきこと。

地場産業支援・女性就労機会の開拓。

住みよい環境づくりなどの議論を。

行政(町)に望むこと

町民を置き去りにしない行政を。

幸田駅前開発は早さをもって推進を。

避難所設備の見直しなど。

本稿の編集にご協力いただきお礼申し上げます。みなさんの活躍を期待します。